

The dynamics of inter ethnic relationships among pastoral peoples in East Africa under political democratization : A case study of the emergence of the new ethnicity of the Ariaal in Northern Kenya after national elections and decentralization

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 内藤, 直樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003901

東アフリカ牧畜社会における政治的民主化と
民族間関係の動態
—北ケニア牧畜民アリアルが経験した地方分権化と
国会議員選挙の事例から—

内 藤 直 樹*

The dynamics of inter-ethnic relationships among pastoral peoples in East Africa
under political democratization: A case study of the emergence of the new
ethnicity of the Ariaal in Northern Kenya after national elections and
decentralization

Naoki Naito

本稿は、近年のアフリカ諸国における政治的民主化と地方分権化の流れのなかで、これまで「国家の外側」に位置づけられてきた東アフリカ牧畜社会の人びとがどのように国家に包摂され、これまでの集団への重層的な帰属にもとづく柔軟な民族間関係にいかなる変化をもたらしているのか検討する。アフリカ諸国が政治的民主化と地方分権化を達成するためには、選挙運動の過程で構築される利害集団間の対話や和解の可能性を模索することが必要とされている。しかしケニアでは1992年の複数政党制や2003年の地方分権制の導入以降、さまざまな地域で再創造された民族への帰属意識にもとづく利害集団間の対立や紛争が深刻化している。ケニア北部に分布する牧畜社会はこれまで、高い移動性と他集団との柔軟な民族間関係を維持することで、家畜喪失のリスクへ対処してきた。これまでは牧畜社会が国家に包摂される過程で、こうした民族間関係の柔軟性は失われてしまうという議論が主流であった。しかしながら東アフリカ牧畜社会はすでに長期にわたって国家との関わりを経験しており、そのなかで利害集団間の敵意を調停する技法を育んできた。こうした牧畜的な「敵」との対処法は、アフリカの政治的民主化を達成するための潜在力を持っていると考えられる。

*国立民族学博物館機関研究員

Key Words : East African Pastoral Society, Democratization, Decentralization, Ethnosystem, Inter-ethnic tie

キーワード : 東アフリカ牧畜社会, 政治的民主化, 地方分権, エスノシステム, 民族を超える紐帯

This paper will investigate the dynamic process of how the ethnic identities of pastoral society were homogenized and fixed by the nation state, and how they revived their diversity and flexibility as ethnic identities. The Kenyan national election, which was held on Dec. 27, 2007, caused a major disruption in that country. The ethnic claim over political resources during the election also caused confrontation among pastoralists in Laisamis constituency that had preserved a symbiotic relationship for a long time. To ensure that the introduction of a multi-party system in African countries will be a sufficient condition for a democratic political system, eliminating ethnic antagonism is a key factor. Nevertheless, since the introduction of a multi-party system in Kenya in 1992, many ethnic groups have been newly created, or re-created, and inter-ethnic conflicts and disputes in relation to political issues have taken place frequently. That is, it is necessary to seek opportunities for dialog among groups with different interests that were constructed in the process of the election campaign under the multi-party system. The marginalized pastoral society in Kenya has asserted various styles of ethnical identity according to the political, economic, social, and cultural conditions at any given time. In conclusion, this paper will examine the possibilities of ambiguity of ethnic identity in East African pastoral societies as a new surviving strategy for pastoralists in the modern situation.

1 問題の所在	4.2 財政的的地方分権制度 CDF の導入とその影響
1.1 ポストコロニアル国家における周縁社会の包摂	5 2006年国会議員補欠選挙—新たな選挙戦術の導入と政治意識の高まり
1.2 東アフリカ牧畜社会における民族間関係の動態	5.1 選挙運動の個人化
1.3 牧畜の危機	5.2 国民登録の推進による有権者の創出
2 調査地の概要	6 2007年国会議員選挙と「マサゲラ」アイデンティティの出現
2.1 サンプル、レンディーレ、アリアル	6.1 「敵」の創出と呼びかけ
2.2 M集落の概要	6.2 民族単位の地方自治
3 サンプル、アリアル、レンディーレの民族間関係	7 選挙が生み出した対立構造の解消
3.1 エスノシステム	8 考察
3.2 民族を超えるクランの紐帯	8.1 アリアルにおける帰属の重層性
3.3 重層的な帰属意識	8.2 国家への包摂と資源をめぐる対立
3.4 自称と他称	8.3 選挙後の敵意への対処
4 ケニアの財政的的地方分権制度と牧畜社会	9 おわりに
4.1 ケニアの選挙システムとライサミス選挙区	

1 問題の所在

1.1 ポストコロニアル国家における周縁社会の包摂

2007年12月27日のケニア総選挙は、国内に大きな混乱をまねいた。ケニア西部地域や沿岸地域およびナイロビなどで発生した暴動により1,000人以上の死者や数十万人の避難民が発生した。このときナイロビから北に400 kmほど離れた、エチオピアと国境を接するマルサビット県では暴力的な紛争は起こらなかったが、総選挙と同時にこなわれた国会議員選挙の選挙運動をおこなう人びとが、新たなエスニシティを主張した。すなわち国会議員という政治的資源をめぐる戦いが、これまで協同的な関係を維持してきた牧畜集団間に対立的な関係を生じさせたのである。

ウガンダ出身の政治学者マムダニは、植民地権力が人種主義にかわって「慣習」という概念装置を採用し、国家法が支配する都市部と複数の慣習法が小集団を支配する農村部との分割にもとづく「分権化された専制 (decentralized desposium)」をおこなったことが、アフリカのポストコロニアル国家における国民統合の過程で致命的な桎梏になったことを指摘している (Mamdani 1996: 16-18)。すなわちアフリカのポストコロニアル国家においては、植民地期の分権化された専制によって分断された「民族」間の共約可能性をどのように担保するかが大きな課題である。しかしながらケニアでは 1992 年の複数政党制の導入以降、各地の政治エリートが人びとを動員するために民族主義的な感情を鼓舞したことを契機とする集団間の対立や暴力が頻発している (津田 2004)。たとえばケニア第二代大統領ダニエル・アラップ・モイの出身民族とされる「カレンジン族」は、ケニア中西部の言語を共有する小集団を統合した「民族」である。さらにはカレンジン、マサイ、トゥルカナ、サンプルという牧畜民出身の国会議員たちによる KAMATUSA 同盟という超民族的な政治集団が形成されている。こうしたケニアの政治エリートによる集団の統合現象は、少数民族出身の政治エリートがケニアの民族の中で最大の人口をもつキクユ族などの支配的な民族に政治的に対抗することを目的としている。2007 年の総選挙における暴動の多くが、キクユ族と彼らに反感を持つそれ以外の民族との間で発生した暴力である。こうした政治エリートによる民族主義的な扇動は、冷戦構造の崩壊後にアフリカで発生した多くの紛争の原因となっている (栗本 1999)。このような状況のもとで、アフリカのポストコロニアル国家に民主主義的な政治体制の十分条件としての複数政党制を導入する際には、選挙運動によって構築される利害集団間の敵意を、選挙後にいかに解消するかが大きな課題になっている (Lindberg 2006)。

本稿が対象とするケニア北部の牧畜社会は、これまで植民地政府および独立後の政府によって「国家の外側」に位置づけられてきた地域である。北ケニア牧畜民ガブラが、選挙への参加を通じて国家に組み込まれていく過程を検討した曾我は、「自分たちの代表」を決める国会議員選挙という経験を経ることで、それ以前の多様な差異を内包した柔軟な文化共同体から、均質で固定的な文化・政治共同体に再編されたと結論づけている (曾我 1997)。たしかに、これまで北ケニアの牧畜社会は「国家の外側」に位置してきた。しかしながら「国家の外側」への排除は、国家の不在というよりも、むしろ国家を媒介とする現象である。すなわち「国家の外側」への排除は、国家による「中心」と「周縁」の空間的な分類をもとに達成されている。こうした経緯を考慮すれば、近年の政治的民主化や地方分権化を通じた国家への包摂によって、これ

まで「周縁」に位置づけられてきた共同体の性質が根本的に変化したとは考えにくい点もある。むしろ植民地期から現在に至る長期間にわたって「国家の外側」に排除されてきた周縁に生きる人びとは、その時々々の政治・経済・社会・文化的状況に応じて、さまざまな民族や集団への帰属意識を表明してきたという指摘がある（Little 1992: 453）。だとすれば、周縁社会の民族や集団の帰属意識が国家との関係のなかで均質化・固定化されたり、多様性と柔軟性を取り戻してゆく動態が検討される必要がある。

1.2 東アフリカ牧畜社会における民族間関係の動態

東アフリカの牧畜社会には高度に構造化された分節出自体系（segmentary descent system）と年齢体系（age system）という制度によって統合された社会が複数存在する。分節出自体系は、たとえば民族・半族・クラン・リネージなどの順に階層的に分節化された父系の血縁原理にもとづく社会範疇によって構成されている。また年齢体系には、生物学的な年齢や世代間の関係といった生物・社会学的な長幼原理にもとづいて組織される年齢組、世代組、互隔組といった社会範疇が存在する。そして人びとの社会的地位は、これらの社会範疇によって規定され、そこには行為や関係を指定する規範が付随している。東アフリカ牧畜民の社会関係に関する共時的な視点に立った研究は「社会構造や制度に規定される存在としての人間」という側面を重視している。たとえば人びとの社会的相互行為が分節出自体系と年齢体系によって規定される側面（佐藤 2002; Spencer 1965）や、分節出自体系によって定義された親族の相互扶助関係（Potkanski 1994）に焦点が当てられている。

それに対して、歴史人類学的方法論にもとづく研究は、「社会構造や制度が人間活動によって変化する動態」に注目した研究を展開している。たとえば Schlee（1989）や Sobania（1980）は、儀礼や社会構造、口承伝承を比較することで、現在のケニアに分布する牧畜諸社会が、どのような分裂や融合の末に形成されたかを仮説的に再構成した。それらによれば東アフリカの牧畜集団は干ばつや疫病、紛争などを契機に分裂・離散し、居住地を大きく変更したり、他の生業様式を選択したり、文化すら変えていた。Schlee（1989）は、このような牧畜民の柔軟なアイデンティティのあり方を「動くアイデンティティ（Identities on the move）」とよんだ。また彼は、民族間に存在する越境的な社会関係が、気候変動や略奪などによって家畜群喪失の危機に直面した牧畜民がたよる、重要な社会的資源となってきたことを明らかにした。

また牧畜民のアイデンティティと生業との関連を開発と貧困の文脈において検討した Anderson と Broch-Due（1999）は、東アフリカ牧畜社会が家畜を失った者を社会

的に排除し、非牧畜民化してきたという点を強調した。たとえば干ばつの発生や疫病の流行、家畜の略奪などによって家畜を喪失した牧畜民が一時的に小家畜（ヤギ・ヒツジ）飼育に特化したり、牧畜をすてて農耕民や狩猟採集民になった例が、牧畜民のある種の「貧困対処システム」として報告されてきた（Spencer 1973; Waller 1985; Sobania 1988 など）。そして牧畜社会に隣接する農耕民や狩猟採集民が、牧畜民との相互交渉の過程で牧畜化するという現象も見られた（Spencer 1998）。このような牧畜民と非牧畜民間の長期にわたる動態的な経済的関係は、東アフリカ牧畜社会の特徴として指摘されてきた（Spear and Waller 1993）。それ以外にも、牧畜民は定住農耕民と関係を持ち、畜産物と農産物の交易や刈り後放牧などの共生的な生産をおこなってきた。このように、東アフリカ牧畜社会における生業システムには、他民族との民族間関係が深く埋め込まれている。

このような東アフリカ牧畜社会がもつ民族間の動態や社会的な柔軟性に注目した Spencer (1998) は、「牧畜民」を中心的な專業牧畜とそれをとりまく農耕や狩猟採集などの非牧畜的生業活動との間の連続性のなかに位置づける「牧畜連続体（Pastoral continuum）」という概念を提出した。そして「牧畜連続体」に包含される社会には共通して年齢体系、分節出自体系、複婚制といった社会制度がみられること、非牧畜社会が牧畜化する際には、これらの社会制度も一緒に導入されると主張した。すなわち「牧畜連続体」という概念は、東アフリカの牧畜社会の特徴を、生産活動における生態学的な適応と、社会的・政治的な編成原理の両面から包括的に定義したものである。

1.3 牧畜の危機

しかしながら「コモンズの悲劇」論の登場以降、牧畜は、乾燥地の生態系の破壊者として見なされるようになりはじめた。ハーディン（Hardin 1968）は、個人所有の家畜が共有の土地で放牧されるという状況を仮定し、個々人は環境への負荷を考慮せずに家畜数を増加させようとするために過放牧がひき起こされると説明した。それは、これまでの文化生態学的な研究が明らかにしてきた牧畜民の家畜群最大化戦略（Dyson-Hudson, R. and N. Dyson-Hudson 1969）といった行動を、アフリカの砂漠化や乾燥地の拡大をもたらす誤った資源管理として位置づけた。また、同時期の1970年代にサヘル地域で頻発した干ばつをうけて、砂漠化（desertification）の抑止が地球規模の環境的課題として浮上した。国連は1976年にナイロビでおこなわれた砂漠化に関する会議を後援し、国連環境プログラム（UNEP）に砂漠化部門を作った。そこでは「牧畜民の在来の放牧地共有制度による誤った資源管理は『砂漠化』の要因であ

る」という判断のもとに、牧畜民の在来の制度の制限や解体が目標にかかげられた。こうした判断に基づき 1960 年代の半ば以降、牧畜民に対する灌漑による定住農耕推進プロジェクトがおこなわれた。しかしながら、こうした定住化プロジェクトは、結果的に井戸や町への過度の人口集中と土地荒廃を引き起こした。さらに灌漑農耕による農民と牧畜民の人口増加は、牧畜民同士や牧畜民と農民間の資源をめぐるコンフリクトをまねいている (Hogg 1986; Little 1987)。

さらに 1990 年代以降のケニア・ウガンダ・スーダン・エチオピア・ソマリアを含む北東アフリカ地域では、経済的困難や政治的混乱などにより政府の能力が低下し、国家への信頼がゆらいでいる。現在この地域では、紛争の発生を契機に国境を越えて流入する移民や難民とホスト社会の人びとの共生関係の構築、あるいは紛争地域から流入する銃器をもちいた家畜の略奪といった低強度紛争の抑止などが課題となっている。こうした状況のなか、紛争を避けるために他地域に移動した牧畜民と、移動先の牧畜民との間で生態資源をめぐる敵対関係が生ずることで利用できない土地が増え、さらに放牧圧が高まるといった事態も生じている (Hogg 1992)。また、政治エリートが人びとを動員するために、民族に関する本質主義的な言説を流布することで、紛争当事者の意識にネガティブな共同体主義が再生産され、紛争が先鋭化するという事態も生じている。こうした動きのなかで、これまで牧畜民の生活を支えてきた牧畜民と農耕民や牧畜民と牧畜民との間の関係は寸断された。そして多くの論者が述べるように (たとえば Galaty et al. (eds.) 1981)、牧畜民はこれまでになく生業経済を維持する能力が少ない状態で 21 世紀に突入したのである。すなわち、東アフリカ牧畜社会の将来を検討するためには、牧畜社会がこれまでもっていた隣接集団との動的な関係をどのように維持するのかが大きな課題である。

上記の問題意識にもとづき、本稿では、ケニア北部に位置するマルサビット県・ライサミス選挙区において、2007 年総選挙の選挙運動時に新たなエスニシティが出現した事例を検討する。まず対象社会の特徴を整理した後、近年のアフリカにおける地方分権化の潮流のなかで導入された CDF (Constituency Development Fund) というケニアの財政的的地方分権制度が牧畜社会に与えた影響について説明する。そのうえで、2006 年の補欠選挙と 2007 年の総選挙が、対象社会の人びとのエスニシティをどのように変質させたのかを検討する。そして、ケニアの民主化と地方分権化にともなう集団間の敵意の創造過程および牧畜社会におけるその解消のあり方について考察する。

2 調査地の概要

2.1 サンプル, レンディーレ, アリアール

アリアールは、ウシ牧畜民サンプルとラクダ牧畜民レンディーレが共生的関係の歴史を積み重ねるなかで形成された集団であり、両民族の間でウシ—ラクダ複合経済 (cattle-camel complex economy) を採用している (Spencer 1973)。アリアールとは、レンディーレによる他称である。そしてアリアールに相当するサンプル語はマサゲラである。アリアールは「サンプルとレンディーレの間のどこか」に存在するゆるやかな文化共同体であり、二進法的な論理では把握することができない北ケニアの民族範疇の特性を代表するような存在である (Spencer 1973)。

サンプル

サンプルは、おもにケニア中北部のリフトバレー州サンプル県にひろがる半乾燥地域に居住する牧畜民である (図1)。その人口は、1989年のセンサスによると約10万人であり (Republic of Kenya 1989)、ナイル・サハラ語族の東スーダン語群のなかで東ナイロート系に分類されるマー語の一方言であるサンプル語を話す (Gregersen 1977)。多くの人びとは比較的定住性の高い牧畜を主な生業とし、ウシや小家畜、駄用のロバ、また少数ながら地域によってはラクダを飼育することで生計を成り立たせている。しかし、降雨量が比較的多い高地では農耕もとりいれられているし、国内の大都市や観光地へ出稼ぎに行くなどして賃金労働に従事するものも多い。ひとつの集落 (*nkang*) は、男性とその妻子からなる大家族によって構成されている。また、同じサブ・クランは、ゆるやかな地域集団を構成する。

レンディーレ

レンディーレはおもにケニア北部のノースイースタン州マルサビット県にひろがる乾燥地域に居住する牧畜民である。1989年のセンサスによると、人口は約3万人である (Republic of Kenya 1989)。言語的にはアフロ・アジア語族のクシ系諸語のなかで、東クシ系に分類されるレンディーレ語を話す人びとである (Gregersen 1977)。しかし近年、若年世代のあいだでは、サンプル語を話すものが増加している (Fratkin 1993)。人びとは降雨量が少なく、降雨のパターンも不安定な地域で、ラクダと小家



図1 アリアルと近隣民族の位置

畜に依存した牧畜を営んでいる。マルサビット山周辺に位置する一部の開拓村では、農耕がおこなわれている。また近年では、ナイロビなどの大都市に出稼ぎに行くものも多い。レンディーレは、同じサブ・クランに属する人びとが集まって大規模な集落 (*gob*) を形成する。本稿ではこれをクラン集落¹⁾と呼ぶこととする。クラン集落は儀礼の共催や大規模なラクダ放牧キャンプ形成の単位となる。

アリアール

アリアールは、おもにサンプル県北部とマルサビット県南部にかけての両県の県境や、マルサビット県の幹線道路沿いに点在する集落や町に居住している。アリアールでは、サンプル語とレンディーレ語の両方が話されている。しかし近年、アリアールやレンディーレが、ナイロビなどの大きな市場に近く市場経済により統合されたサンプル経済に接触するにつれて、言語や服装、飼養家畜といった面でサンプル文化が受容されつつある (Fratkin 1993)。しかし、移住や婚姻などを契機にレンディーレの集落で生活しているものも少なからずいる。生活のありようは地域によって異なるが、マルサビット県の低地平原では、レンディーレと類似したクラン集落を拠点にした移動性の高い遊牧的な牧畜を営んでいる。飼育している家畜種はラクダ、ウシ、小家畜である。アリアールはどちらかといえば増加率の高い小家畜の飼育を中心にして、それをサンプルやレンディーレのウシやラクダと交換することで、家畜頭数を速いペースで増加させている (Fratkin 1991)。ただし、実際に飼育されている家畜の比率には、居住地の環境や個々人の判断によって多様な差異がある (内藤 2005)。マルサビット県の幹線道路沿いの集落では、農耕もおこなわれている。また、サンプルやレンディーレと同様に、ナイロビなどの大都市への出稼ぎなどの賃金労働にも従事する。ナイロビでの職探しの際、アリアールの人びとは必要に応じてサンプル側の人脈をたよったり、レンディーレ側の人脈をたよったりもする。

アリアールの存在はケニア国内ではほとんど知られていない。たとえばケニア政府は、5年おきに実施する人口センサスにおいて「民族別の人口」を算出するが、そこにアリアールというカテゴリーは存在しない (Republic of Kenya 1989)。すなわち、これまでアリアールは、国家によって「民族」として扱われてこなかった。また国内のマスメディアにもアリアールやマサゲラという名称はほとんど登場しない。たとえばケニアの主要英字新聞 Daily Nation において 1998 年から 2008 年までの 10 年間に、アリアールという単語が含まれる記事は 1 件だけで、マサゲラでは 1 件も存在しない。そしてマスメディアは、アリアールをサンプルあるいはレンディーレとして扱ってきた²⁾。

2.2 M 集落の概要

調査対象とした M 集落は、マルサビット県とサンプル県の県境近くに位置する(図 2)。この地域にひろがるンドト山地から低地平原へかけての斜面には、アリアルやレンディーレのクラン集落が点在する。そして調査対象地である M 集落と、1970 年代に調査を開始した人類学者フラトキンの調査対象地であるルクマイ・クランの L 集落の 2 つは低地平原に分布している。もともとこの低地平原はアリアルやレンディーレの人びとにとって生産的な放牧地のひとつとして認識されていた。その一方

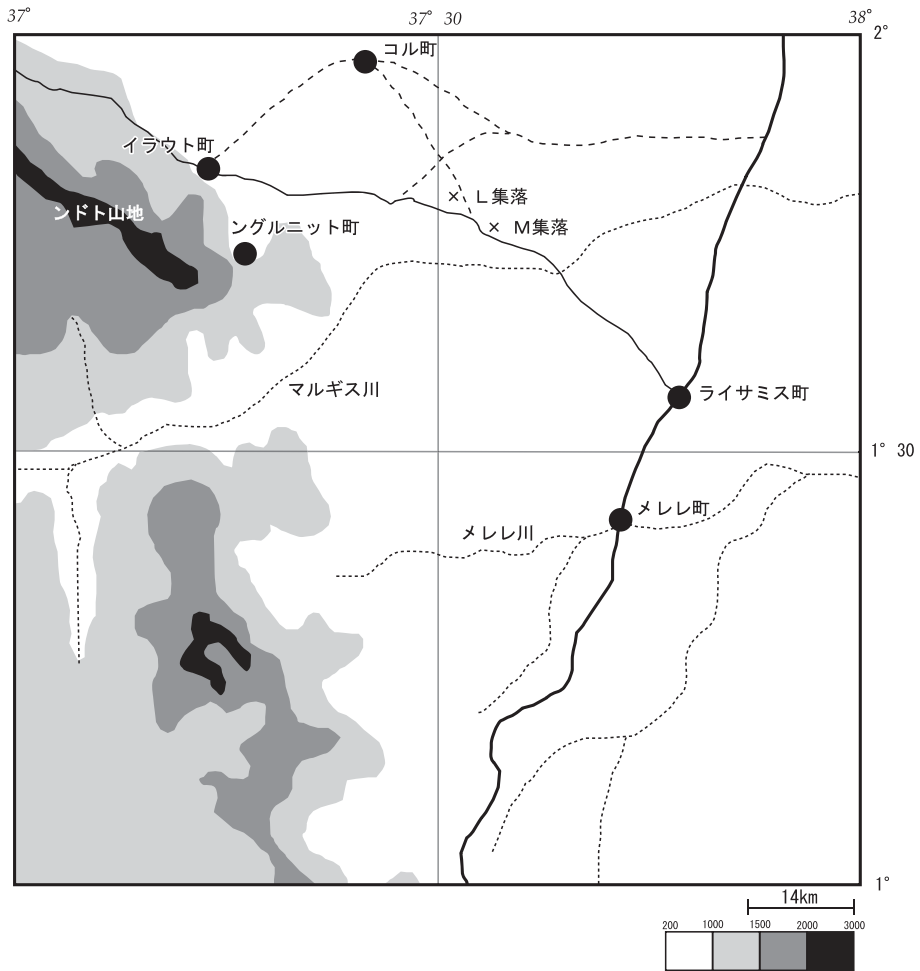


図 2 M 集落の位置

で、水資源を安定的に確保することが難しいため、集落は存在しなかった。しかし1980年代におこなわれた大規模な牧畜開発プロジェクト³⁾によって井戸が掘られ、低地平原の水不足問題は解消した。

1980年代の初期に、それまで高地のングルニット町付近に位置していたL集落やM集落がそれぞれの集落から分裂し、その一部が低地平原に移住した。現在のL集落とM集落の住民に対する聞き取り調査によれば、集落の分裂の原因は、1970年代のングルニット町付近への牧畜民の人口集中と過放牧による環境劣化や水資源不足問題であったという。現在では、町から離れた低地平原の集落において、降雨量が少ない低地での飼育に適し泌乳量が多いラクダを基盤とした生業的な牧畜を営む一方で、もともと居住していた比較的降雨量が多い高地の家畜キャンプにおいては市場価値が高いウシ牧畜を営んでいる。M集落の住民が属する出自集団を調査した結果、アリアールの他のクラン集落の構成とは明らかに異なり、実際にマソラ・クランに帰属する世帯は全体の2割程度にすぎなかった。これは、M集落が町から来る多くの移住者を受け入れることで拡大してきたことによる。

3 サンプル、アリアール、レンディーレの民族間関係

3.1 エスノシステム

サンプル、アリアール、レンディーレ社会は相互に類似した点を持つ分節出自体系と年齢体系という縦糸と横糸によって特徴づけられている。そして各体系に付随する諸規範が、結婚・共住・協業・財の交換・敵対などといった生活のさまざまな場面における人びとの行為や関係を規程している。

サンプル、アリアール、レンディーレの男性は、年齢体系のもとで少年（サンプル語：*laieni*、レンディーレ語：*inam*）、青年（サンプル語：*moran*、レンディーレ語：*her*）、長老（サンプル語：*lpayan*、レンディーレ語：*aram*）の3つの年齢階梯にわけられる。10代後半から20代前半の少年は約14年ごとにおこなわれる一斉割礼を受けた時に新たな年齢組を組織して青年階梯にすすむ。このとき同時に、これまで青年階梯に属していた年齢組のメンバーは結婚して長老階梯にすすむ。現存する年齢組は、年長のものからメクリ（*Mekuri*）年齢組、キマニキ（*Kimaniki*）年齢組、キチリ（*Kishiri*）年齢組、コロロ（*Kororo*）年齢組、モーリ（*Moli*）年齢組が長老階梯であり、メテレ（*Metele*）年齢組が青年階梯である⁴⁾。女性の割礼は結婚とともにおこなわれ

表1 サンプル、アリアル、レンディーレの年齢組編成年（推定）

サンプル		アリアル		レンディーレ	
年齢組名	年齢組の編成年	年齢組名	年齢組の編成年	年齢組名	年齢組の編成年
メクリ (Mekuri)	1936	メクリ (Mekuri)	1936	リバーレ (Libaale)	1937
キマニキ (Kimaniki)	1948	キマニキ (Kimaniki)	1948	イルバンディフ (Irbandif)	1951
キチリ (Kishiri)	1960	キチリ (Kishiri)	1962	キチリ (Kishiri)	1965
コロロ (Kororo)	1976	コロロ (Kororo)	1977	コロロ (Kororo)	1979
モーリ (Moli)	1990	モーリ (Moli)	1992	モーリ (Moli)	1993
キシヤミ (Kishami)	2005	メテレ (Metetele)	2007	メテレ (Metetele)	2007

る。このため、男性のような明確な年齢組が組織されることはないが、結婚前は同世代の男性と同じ年齢組に属し、結婚後には夫の年齢組に属するという、二種類のゆるやかな紐帯が形成される。男女ともに、おなじ年齢組に属する人びとの連帯は生涯を通じて変わらない。そして「同じ年齢組に属する成員同士は連帯すべきである」とされている。

サンプル、アリアル、レンディーレの年齢体系は、割礼がおこなわれる周期が相互に類似しているし、現在では年齢組名も同一のものになっている（表1）。この点から、サンプル、アリアル、レンディーレは年齢体系が民族をこえて相互に共鳴する「エスノシステム」（福井 1988）を形成していると考えられる。このエスノシステムのなかで、サンプル、アリアル、レンディーレの男性は民族をこえて「同じ年齢組に帰属する」という意識を共有することが可能となっている。

3.2 民族を超えるクランの紐帯

サンプルとレンディーレはともに半族・クラン・サブクラン・リネージという順に父系の出自集団が階層的に分節する構造をなす分節出自体系を有している⁵⁾。なかでもクランは外婚単位として重要な単位である。またサブクランは、サンプルが地域集団を形成し、レンディーレがクラン集落を構成する単位である。そしてリネージは、家畜群を協同放牧する単位である。

サンプルとレンディーレには、出自集団（クラン・サブクラン・リネージ）同士の兄弟関係（Brotherhood in descent）と義兄弟関係（Bond-brotherhood）が存在する（Spencer 1965; 1973）。兄弟関係（サンプル語：*lalache*、レンディーレ語：*waraal*）とは、おたがいに共通の祖先から派生したと考えられている、ふたつの出自集団間の関係である。この関係にある出自集団同士には外婚規則が適用される。そして義兄弟関係（サンプル語：*langat*、レンディーレ語：*cof*）は、特定の事件を契機に形成される出自分節間の関係である。サンプルの場合、この関係にある分節の成員同士はおたがいに特別な尊敬の念をもって対応しなければならず、相手の要求を断ることはできな

いことが多い。この関係にある分節間には、外婚規制が適用される場合とされない場合とがある。またレンディーレの場合、この関係にあるもの同士は尊敬というよりも、相互扶助の関係にあり、婚姻相手として望ましいとされることも多い。

たとえばアリアルールのサマナ (Samana) 家は自らの出自集団がもつ兄弟関係の根拠を以下のように説明する。

サマナ家はもともとレンディーレのデュブサイ・クランに属していた。しかし、あるサマナの家系がトゥルカナの襲撃にあい、この家系はひとりの幼い男の子を除いて全滅した。この子はサンプルのマソラ・クランに属する家族の女性に拾われ、養子として育てられた。その結果、彼は本当の出自を知らないままマソラ・クランの成員として育ち、割礼もし、結婚もした。しかしその後、この滅びたサマナ家を知っているレンディーレに偶然出会ったときに、自分がサマナ家の生き残りであることが明らかになった。そしてそれ以来、サマナ家はデュブサイ・クランであり、かつマソラ・クランでもあることになった。

このような越境的なクラン間関係はレンディーレやサンプルの分節出自体系内にも、レンディーレとサンプルの分節出自体系間にも存在する。こうした越境的な分節間関係のネットワークを考慮すれば、一見すると独立した階層構造をもつように見えるサンプルとレンディーレの分節出自体系もまた、民族を超えたひとつのシステムとして成立しているとも見ることが出来る。

3.3 重層的な帰属意識

アリアルールは独自の分節出自体系をもたず、ルマソラ、ルクマイ、ロンゲリ、ロロキというサンプルと同じ名前の4つのクランとイトゥリア⁶⁾というクランが存在する(図3)。そして外婚単位であるクランが最も重要な出自集団である。約14年周期でおこなわれる年齢組の更新儀礼はサブ・クラン単位でおこなわれる。そしてアリアルールもレンディーレと同様のクラン集落を形成する。

アリアルールのクランは、かつてレンディーレに移住したサンプルを始祖とする血縁集団であると認識されている。そしてサンプルの側も、アリアルールのクランがサンプルのクランから派生したと考えている。サンプルの各クランの青年階梯の儀礼的代表 (*launoni*) は、「自分たちのクラン」の青年すべてを訪問するとされているが、その対象にアリアルールの各クランの青年も含まれている⁷⁾。

サンプルやレンディーレと同じように、アリアルール社会においても出自分節と年齢組というふたつの社会範疇への帰属が、個人の社会的な位置を特定する。サンプル、レンディーレそしてアリアルールにおいては2006-7年に、年齢組の更新時期をむかえ

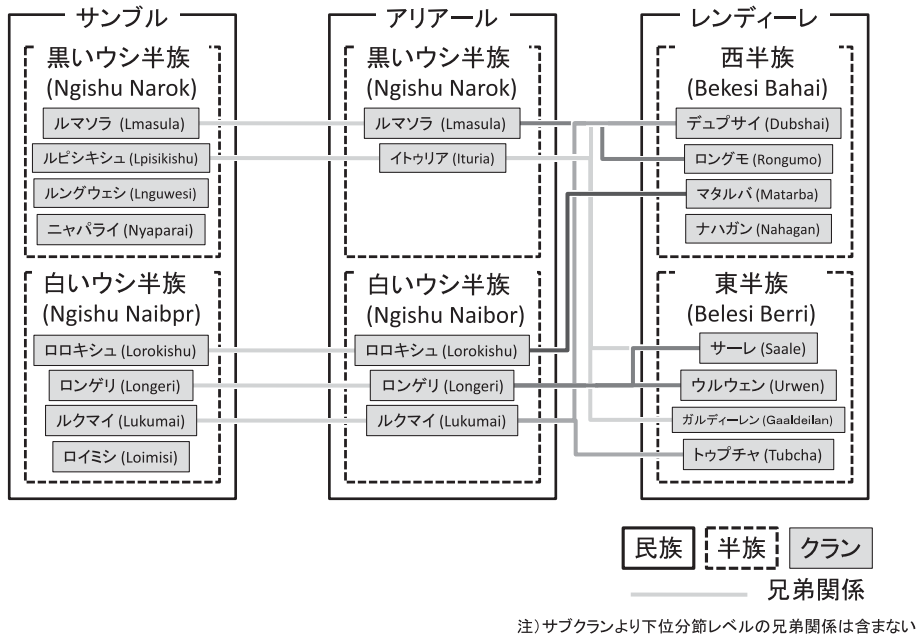


図3 サンプル、アリアール、レンディーレの分節出自体系とおもな兄弟関係

た。先行研究によれば、この時期には既存の社会秩序や慣習の再解釈・再検討がおこる (Spencer 1998)。たとえばレンディーレやアリアール社会では、結婚後に新郎が数年間妻方居住をおこなう。しかし、さまざまな事情から妻方居住が長期にわたる場合がある。もし妻方居住が彼の息子の割礼の時期 (結婚後の15年前後) まで継続した場合、夫は息子を自分の出身クラン A か、今居住している妻のクラン B のどちらで割礼するかを選択を迫られる。もし夫が妻のクラン B での割礼を選択し、子孫もまたクラン B での割礼儀礼を継続的に実践した場合、子孫は新たにクラン B への成員権を獲得することが可能となる。しかしながら、もともとのクラン A への成員権が忘れられることも無い。アリアールでは通常の父系血縁原理にしたがったクランへの帰属を骨 (*loit*)、妻方居住の継続や歴史的な出来事を契機とする新たな帰属を肉 (*nkiri*) と呼び区別している (内藤 2004)。このようにアリアールのクランへの帰属は、骨の帰属の上に複数の肉の帰属が積み重なった重層的で複合的なものである (図4)。アリアールの人びとは、自分たちのクランに編入してから歴史の長い出自集団を、“古い (*musana*)”、“目 (*ngonyek*)”、“腹 (*ngocheke*)” という形容詞をつけて呼ぶこともある。たとえば、前項で兄弟関係の伝承を検討したサマナ家は、現在サンプル、アリアール、レンディーレ社会すべてに存在しており、サンプルやアリアールに

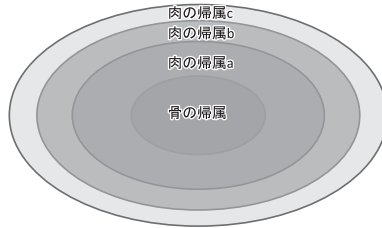


図4 アリアールの重層的な帰属意識

においては、「古いマソラ」と呼ばれる。また重層的なクランへの帰属意識は、「自分たちはもともとレンディーレだったので自分たちの骨はデュプサイだが、肉はサンプルのマソラだ」と表現される。そして遊牧生活の中でレンディーレと出会った場合にはデュプサイ・クランに、逆にサンプルやアリアールと出会った場合にはマソラ・クランに帰属していると主張していた。このようにアリアールの人びとのクランへの帰属意識は重層的であるばかりでなく、状況依存的なものである。このように状況依存的な帰属をもつ個人が、特定の場面でどの帰属を重視するかはその時の状況に依存する (Schlee 1989)。

3.4 自称と他称

アリアール、サンプル、レンディーレという民族の名称が、ローカルな文脈でどのように用いられてきたのか検討する (図5)。サンプルは自らをロコップ (*lokop*) と呼び、レンディーレをランティレイ (*rantillei*) と呼ぶ。そしてサンプルが、「出自のうえではレンディーレとも関係のあるサンプル語話者」という存在を認識している場合には、アリアールのことをマサゲラ (*massagera*) と呼ぶ。サンプル県における筆者の経験では、アリアールとレンディーレを区別することなく、ランティレイと呼称していたことが多かった。しかしながら、状況によってはアリアールも「おなじサンプルである」として扱われることもあった。

一方、レンディーレは自らをレンディーレ (*rendille*) と呼び、サンプルをコロ (*koro*) と呼ぶ。レンディーレが、「出自のうえではサンプルとも関係のあるレンディーレ語話者」をアリアール (*ariaal*) と呼ぶ。しかし筆者の観察によれば、同一の個人が、状況や文脈によってアリアールと呼ばれたり、レンディーレと呼ばれたり、コロと呼ばれたりしていた。すなわち先行研究において対象とされてきた「アリアール」という範疇には、サンプルからランティレイあるいはマサゲラと、レンディーレからはレンディーレ、コロあるいはアリアールと名指しされうる人びとが含まれている。

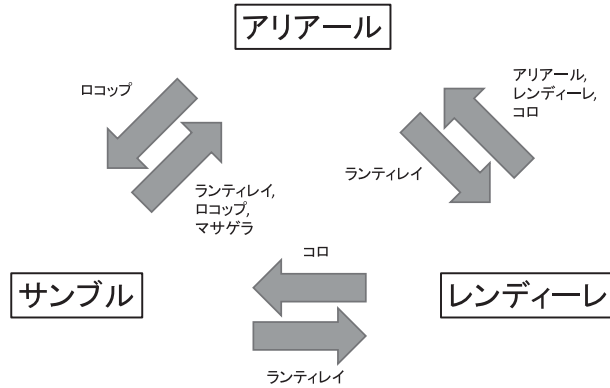


図5 サンプル、アリアルル、レンディーレ相互の他称の組み合わせ

次にアリアルルの自称について検討する。アリアルルの民族の名乗りは、状況や文脈に依存して変わりうる。しかしながら、1999年から2005年までの筆者の調査期間中に、アリアルルという言葉が自称として用いられることはほとんどなかった。人びとの社会生活において重要なのはクランへの帰属であり、そのクラン名はサンプルと同一である。そして、アリアルルとサンプルのクランを区別し、アリアルルのクラン群だけをひとつの「全体」として統合するような機会はこれまで存在しなかった。

4 ケニアの財政的地方分権制度と牧畜社会

4.1 ケニアの選挙システムとライサミス選挙区

ケニアでは5年おきに総選挙がおこなわれる。総選挙では、大統領選と同時に国会議員選と県議員選がおこなわれる。国会議員は210に区切られた小選挙区ごとに選出される。県議員は県内の選挙区（Ward）ごとに選出される。本稿では大統領選と県議員選に関する選挙運動については言及しない。なぜなら大統領選に関するライサミス選挙区の人びとの関心は概して低かったし、県議員選は各選挙区に分布するクランの成員数にしたがって決定し、あまり問題化しなかったからである。

本章が対象とするライサミス選挙区はマルサビット県の南部に位置する。住民の多くはレンディーレとアリアルルで、それ以外には比較的少数のサンプルとトゥルカナが居住している。図6は、ライサミス選挙区内の行政区分の中心的な町の位置を示している。コルとカルギ周辺にはレンディーレ、ロゴロゴ・ライサミス・メレレ・ング

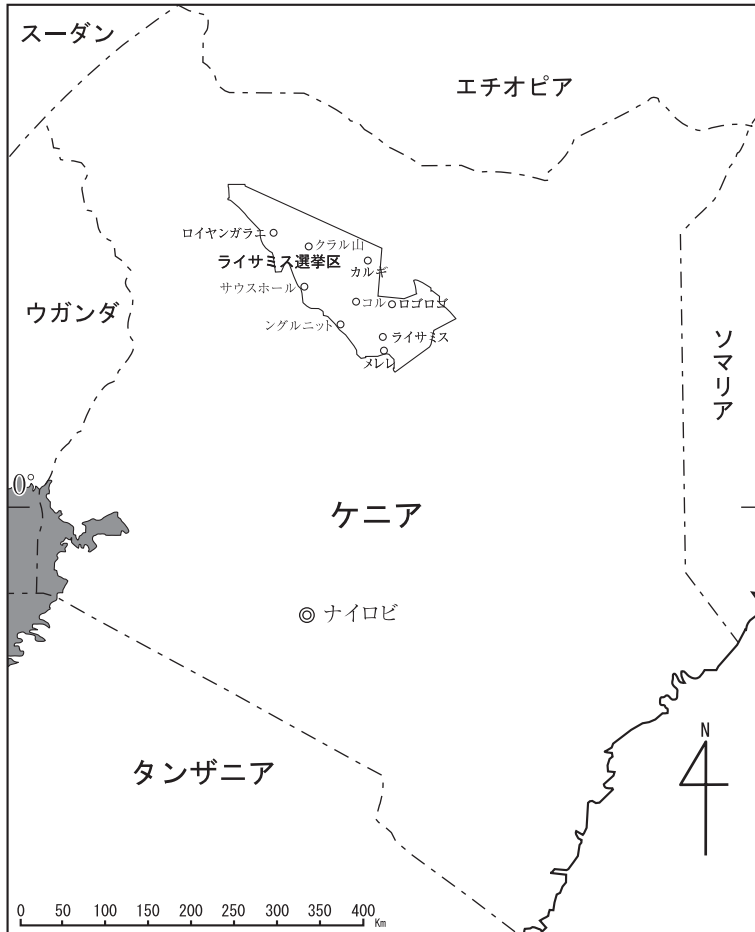


図6 ライサミス選挙区と選挙区内の町の位置

ルニット周辺にはアリアル、サウスホールとクラル山周辺には少数のサンプルが、ロイヤンガラニにはレンディーレと少数のトゥルカナが居住している。本論ではこうした住民の構成にそくして便宜的に、ライサミス選挙区をレンディーレ地域（コル、カルギ）、アリアル地域（ロゴロゴ、ライサミス、メレレ、シングルニット）、サンプル・トゥルカナ地域（サウスホール、クラル山、ロイヤンガラニ）の3つに区分する。

4.2 財政的地方分権制度 CDF の導入とその影響

ケニアは独立後、中央集権的な政治体制を構築しており、ケニア、ウガンダ、タンザニア、ルワンダ、ブルンジからなる東アフリカ共同体（East African Community）の

なかでも地方分権化の進捗がもっとも遅れている国である。このため地方自治体や地方機関の機能が脆弱であり、地方におけるサービス・デリバリー制度は未発達である。しかしながら1990年代後半以降、国際社会からの政治的民主化の圧力と貧困削減の必要性から財政的分権化を中心とする改革がおこなわれた。

こうした流れのなかで、2003年にケニア政府は、CDF (Constituency Development Fund)・選挙区開発基金を導入した。CDFは選挙区の開発を目的とした地方分権的な財政配分システムであり、現時点では政府歳入の2.5%が支出されている⁸⁾。政府歳入から交付されたCDFの約70%が210の選挙区で均等に配分され、残りの30%は選挙区ごとの貧困指数によって配分される。選挙区に配分されたCDFの用途は、その選挙区の委員会が決定する。委員会のメンバーは、選挙区の国会議員を中心に、公務員、NGO関係者、地域住民の代表などで構成されている。それゆえ、CDFは国会議員の政治的資源になっているという問題点が指摘されている(笹岡2007)。

ケニアにおける地方分権化の特徴を分析した笹岡(2007)は、CDFのメリットとして、1)資源配分のなかった地域への資源の流入、2)PRS (Poverty Reduction Strategy)・貧困削減戦略にとって重要なセクター(教育、保険、水)の選択、3)国内資源を原資としたオーナーシップの存在(援助依存性の少なさ)を指摘している。またCDFのリスクとして、1)行政との関係や調整の弱さ、2)他の予算との重複、3)経常予算への対応の弱さを指摘している。

表2はライサミス選挙区内の地域ごとの、CDF関連プロジェクトで使用された金額の変動を示している。アリアル地域に対するCDFの投入額は増加傾向にある。用途を見ると、診療所や学校、水場(掘り抜き井戸)の建設に予算が割かれている(表3)。すなわち2003年以降、アリアル地域に対して重点的に診療所や学校、水場が建設されたことを意味する。これはレンディーレ地域には、CDFの導入以前にすでに診療所、学校や水場が存在していたことに関連していると思われる。レンディーレ地域を構成するコルやカルギは教会による援助を中心に形成された町であり、診療所や学校、掘り抜き井戸が1980年代に建設されている。だが、こうした設備はアリアル地域の町や集落には、これまで十分に建設されてこなかった。すなわちライサミス選挙区はこれまで「国家の外側」として位置づけられ、十分な行政サービスが行き届いていなかったが、レンディーレ地域においては国家の機能の一部を教会や国際援助機関が代行していた。しかしながらアリアル地域にはこうした代行サービスすら十分に行き届いていなかったことが考えられる。いわば「周縁のなかの周縁」に暮らしてきたアリアルの人びとは、CDFの導入以降、これまで望んでも叶えられること

表2 ライサミス選挙区における CDF 配分額の推移 (地域別)

Year	アリアル地域	レンディーレ地域	サンプル・トゥルカナ地域
2003	1,620	1,250	6,300
2004	5,300	4,750	2,182
2005	10,200	5,300	5,700
2006	14,133	5,800	5,050

注1: Constituencies Development Fund (<http://www.cdf.go.ke/>) より作成。
 注2: アリアル地域はメレレ・ライサミス・ロゴロゴ・ングルニット・イラウトから、レンディーレ地域はコル・カルギから、サンプル・トゥルカナ地域はロイヤンガラニ、クラル山、サウスホールからなる。
 注3: 単位はケニアシリング (ksh)。

表3 ライサミス選挙区における CDF 配分額の推移 (地域別)

area	application of CDF			
	water	education	health	others
アリアル地域	8,200	5,550	2,550	800
レンディーレ地域	9,673	11,660	5,700	1,220
サンプル・トゥルカナ地域	2,400	12,882	3,150	800

注1: Constituencies Development Fund (<http://www.cdf.go.ke/>) より作成。
 注2: アリアル地域はメレレ・ライサミス・ロゴロゴ・ングルニット・イラウトから、レンディーレ地域はコル・カルギから、サンプル・トゥルカナ地域はロイヤンガラニ、クラル山、サウスホールからなる。
 注3: 単位はケニアシリング (ksh)。

がなかったさまざまな設備がつぎつぎと建設され、牧畜集落での暮らしぶりが急速に変化していく様に驚愕しつつも、それを歓迎していた。

CDFによる牧畜集落の急速な変化やそれに対する人びとの驚きは、同時にCDFが国会議員の「力」を人びとに見せ付けるための強力な政治的資源になったことを意味していた。これまで国会議員という政治資源は、人びとの個人的要求を達成するための手段として認識されてきた。人びとは民族の区別をあまり意識することなく、たとえば禁固者の釈放、就職先の斡旋、高等教育機関への進学やそれらにともなう経済的援助が必要なときに選挙区の国会議員を頼っていた。国会議員も、請願者がアリアルかレンディーレかについてはあまり意識していないようであった。しかしながらCDFの導入以降、国会議員は人びとの生存にとって重要な資源を創造する力を得た。それにともない国会議員選挙はまさに「資源をめぐる争い」の様相を呈しはじめている。一方、民主化という観点では、選挙時の国会議員の演説を、資源創出の「実行可能性」という観点から検討し、投票するという態度をとる人びとが増えつつあるなど、一定の評価ができる点もある。



写真1 アリアールの牧畜集落における教会と学校の建設風景（2005年）

5 2006年国会議員補欠選挙——新たな選挙戦術の導入と政治意識の高まり

5.1 選挙運動の個人化

ライサミス選挙区を含む北ケニアの複数の選挙区では、2006年7月に国会議員の補欠選挙がおこなわれた。北ケニアの民族紛争の調停に向かった現職国会議員たちが飛行機事故で死亡したためである。死亡したライサミス選挙区の国会議員はレンディーレのサーレ・クラン出身だった。マスメディアや関係者の多くは、補欠選挙の勝者は死亡した現職の国会議員の妻でアリアールのマソラ・クラン出身のロイリロ・マリー氏だと予想していた（Daily nation 2007）。ところが開票してみると、アリアールのルルグシュ・クラン出身の新人・ジョセフ・レクトン氏が国会議員の座を勝ち取ったのである。

レクトン氏は高校卒業後、アメリカの大学・大学院を卒業し、アメリカの学校で教師として勤務するかたわら、ケニアで教育系NGOの活動を続けてきた（レクトン2006）。もともと彼は将来の国会議員選出馬のための準備を開始していたようだ。ところが現職国会議員が事故死したため、予定を前倒しして2006年の補欠選挙に出馬した。ここからは、2006年の補欠選挙時に、アリアール出身の国会議員レクトン氏と彼の選挙運動員が、1) 政治的資源や言説をいかにもちいて、人びとを動員したの

か、2) そうした選挙運動がアリアルやレンディーレの社会に与えた影響について検討する。

2006年の補欠選挙以前は、誰に投票するかは、クラン集落の長老会議によって決められていた。それゆえ候補者は、レンディーレやアリアールのクラン集落を訪れると、長老会議を招集し、演説をおこなっていた。また、その際、候補者は長老たちに現金や砂糖、タバコといった心づけを提供していた。この心づけは長老たちが平等に分配していた。こうした選挙活動は「キャンペーン (campaign)」と呼ばれている。しかし、この時点までは、人びとはあまり選挙に関心をもっていなかった。また、誰が誰に投票したかが問題になることもなかった。

しかしながらレクトン氏は、2006年の補欠選挙の際、新たな選挙戦術を導入した。彼はクラン集落ごとに数名の支持者を選んで、「コミッティ (committee)」を結成させた。コミッティのメンバーは、地元の名士および、学校教育、ナイロビ出稼ぎ、開発プロジェクトへの参加や商売の経験がある比較的若い人びとなどである。そしてコミッティのメンバーは秘密の選挙運動員として集落内で選挙運動を秘密裏に展開していた。M集落での聞き取りによれば、補欠選挙のキャンペーン時に、ロイリロ・マリー氏は集落の長老たちに40,000 kshを配ったが、レクトン氏はわずか5,000 kshしか配らなかった。しかしながらレクトン氏は、M集落にコミッティを組織し、メンバーに20,000 kshの勧誘資金を渡し、密かに集落住民の勧誘をおこなわせていた。

コミッティは、アリアルとレンディーレの多くのクラン集落で組織された。この



写真2 国会議員選挙の運動員によるキャンペーン：集落の貯水槽への給水（2007年）

とき、補欠選挙の開票結果が出るまで、多くの人がロイリロ・マリー氏の勝利を予想していた。なぜならレンディーレとアリアルルの多くの長老たちは、「私たちの国会議員の任期中は、彼の妻にやらせよう。そしてつぎの2007年の選挙のときに、新たな国会議員を選ぼう」と表明していたからである。ところが開票の結果、ロイリロ・マリー氏の約5,000票に対し、レクトン氏は約6,000票を獲得した。この結果は、レ



写真3 候補者が用意した車に乗り、歌いながら投票所に向かう女性たち（2002年）

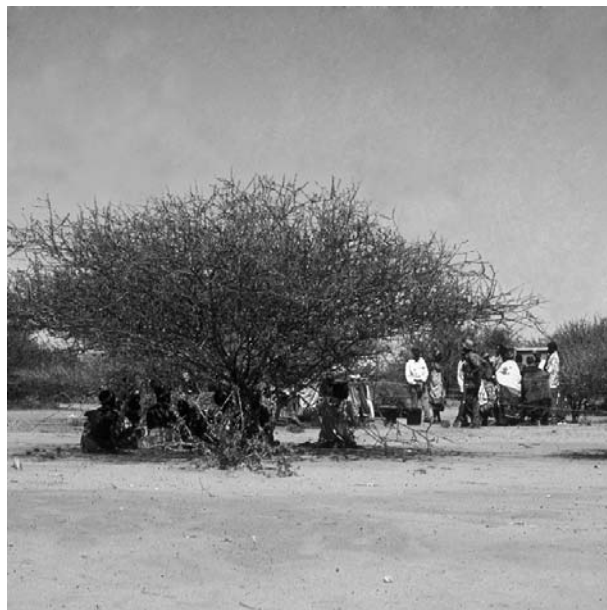


写真4 原野に設置された投票所で投票する女性たち（2002年）

ンディーレやアリアルールの長老におおきな衝撃をあたえた。そして多くの人が、このときはじめて「コミッティ」の存在を知った。

コミッティ・システムの成功理由は、アリアルールの集団構成の複雑さに関連していると考えられる。アリアルールのクラン集落は、「血縁共同体」という体裁をとっているものの、アリアルールの他のクランやレンディーレのメンバーをも含んだ地縁共同体的な性格を備えている。これまではクラン集落の長老会議の場では、言説レベルでは「クラン全体の意思決定」がなされてきた。しかしながら、実際には異なる意見や立場の人も多かった。

【事例1】クラン集落内の意見の対立と出自の暴露⁹⁾

アリアルールのマソラ・クランのクラン集落・M集落は、2007年にルメテレ（キシヤミ）年齢組の割礼儀礼をおこなった。割礼儀礼は、すべての同一クラン集落が同じ月に執行することが望ましい。ところが2007年は雨季の到来が遅く、強く乾燥した低地に位置するM集落は、比較的湿潤な高地に位置する他の5つのクラン集落の3ヶ月後に割礼儀礼を執行した。このときM集落では、割礼儀礼の延期の是非をめぐって激しい議論がおこなわれた。割礼を受け青年階梯に進むことを待望している少年たちは、高地のクラン集落と同時期に割礼儀礼が執行されることを希望していた。少年たちは割礼儀礼を執行するコロロ年齢組の長老の一人の小屋を取り囲み、割礼のすみやかな執行を訴えた。この長老とその家族は、レンディーレのロングモ・クラン出身だが、10数年前にこの集落に移住した。かれらは割礼の時期について話し合う長老会議の際に、習慣にならって割礼儀礼を他の同一クラン集落と同じ月におこなうことを主張した。

しかしながら、M集落の別のコロロ年齢組の長老3人が、この提案に反対した。彼らはマソラ・クラン1名と、一世代前にマソラ・クランに編入した他クラン出身者2名であった。彼らは、このときの乾季は非常に厳しく、家畜群は遠く離れた地域で放牧されているため、①割礼に必要な畜産物の調達が難しいこと、そして②割礼の傷が癒えるまでの期間、少年たちにかわって遠く離れた地域の家畜群の管理する者がいないことを指摘した。そして、雨季が到来し、家畜群が集落に帰還する時まで割礼儀礼を延期することを主張した。長老会議での議論は紛糾したが、割礼儀礼の延期案がクラン集落全体の意志として承認された。議論のゆくえを決定づけたのは、M集落の創始者家族の家長Aと、すみやかな割礼の執行を主張した長老兄弟B1&B2との間で交わされた次のようなやりとりである。

A「おまえたちは、わたしたち（マソラ・クラン）の割礼師がどこにいるのか知っているのだろうかね」

B1&B2「知りません」

A「知らないのか。ならばファラコレン（高地のマソラ・クランの集落）に行き、尋ねなさい」

B1&B2「わたしたちは、ファラコレンに知り合いはいません」

A「割礼師がいる場所も、それについて尋ねるべき人も知らないのに、どうして割礼を執行できるのかね」

B1&B2「わたしたちは知らない」

A「では、おまえたちは昔住んでいた場所に行け。おまえたちは少年の割礼を執行しない。彼らには割礼の執行者がいる」

このやりとりでは、クランの集落のもっとも「正統な」成員である集落の創始者家族の家長Aが、レンディーレの移民である長老の属性を指摘し、彼らを他者化していた。アリアルールのクラン集落に、他のクランや民族の成員が含まれていることは暗黙の了解事項であり、そのことが日常生活において強調されることはない。基本的にあるクラン集落の成員は「おなじクランの成員」として位置づけられている。ところが事例のように、成員間の意見の対立が先鋭化した場合には、しばしば相手の経歴や属性を表面化し、他者化することでその意見を排除しようとすることがある。

コミッティのメンバーの多くは、牧野のクラン集落に居住しつつも教育や出稼ぎ、商売や開発の経験を通じて「外部からの視点」を獲得し、自文化を客体化・客観視できるようになった人びとである。それゆえ彼らは、これまでのアリアルールのクラン集落においてひとつの「クラン共同体」という支配的な言説が構築される政治過程を客体化し、その過程でしばしば暴力的に排除された個別の住民の立場や思惑の違いに注目し、人びとを個別に説得・動員していったと考えられる。

ここで新たな選挙戦術であるコミッティがアリアルールの地域社会に与えた影響についてまとめておく。これまで人びとは、同じクラン共同体の長老による平等で公的な意志決定システムである長老会議の決定に従って投票者を決定してきた。しかしながらコミッティは、教育を受けたり、都市で生活した経験のある人びとの選挙に対する影響力を増大させた。また、これまでの長老会議という公的な場での議論とは異なった私的な選挙運動がおこなわれた結果、人びとの意志決定過程は個人化し、クラン集落の連帯が弱体化した。

【事例2】クラン員の再結集による票田の形成¹⁰⁾

2006年に、アリアルールのルルグシュ・クランのクラン集落の長老たちは、さまざまな場所に居住している同一クラン員を再結集させることを思いついた。それによって、クラン員の結束を強め、アリアルールの代表であるレクトン氏への投票数を増やすことがねらいである。ルルグシュ・クラン出身のレクトン氏は、ルルグシュ・クランの長老たちにとって“息子”である。彼らはレクトン氏の力を借りて、数台のトラックを調達した。そしてマソラ・クランやルクマイ・クランの集落に居住していたルルグシュ・クランの成員の7世帯を、ルルグシュ・クランの儀礼集落に連れ戻した。

これまでアリアルールの人びとにとって重要なのは、現在居住しているクラン集落への帰属であった。しかしながら、事例2が示すように、2006年の補欠選挙以降は骨

の帰属の重要性が増大している。すなわちアリアル社会における民族やクランへの帰属が、選挙という政治的な文脈のなかで問題化されることで、これまで民族やクランへの帰属がもっていた重要性にもとづく状況依存性が発揮される範囲が減少した。

5.2 国民登録の推進による有権者の創出

レクトン氏は、補欠選挙時にもうひとつ画期的な新選挙戦術を発明した。それはアリアルの国民登録の推進による有権者数の増加戦術である。ケニアでは、国民登録をおこない ID カードの交付をうけることが義務づけられている。ところが ID カードが適切に発行されていないケースが相当数存在する。このことは国会等で問題とされてきたが、十分な対策は講じられてこなかった（津田 1995）。

またエチオピアとの国境地域に位置するマルサビット県では、ケニア人とエチオピア人との識別が難しいという理由から、政府の方針で 2002 年から新規の国民登録が停止されていたという。この政策は 2004 年に解除されたが、地方の行政サービス・デリバリー体制が未整備なため、人びとは煩雑で長期にわたる手続きを経なければ ID カードを取得できなかつたし、申請しても ID カードを取得できないものもいた。そのため ID カードを持っている住民は少数のままだった。とはいえ、牧野での生活において ID カードが必要とされる機会は少ないし、選挙にも関心がなかったため、人びとはこうした状況にさほど不便を感じていなかった。ただし都市部では警察官によるセキュリティ・チェックの際に ID カードの提出を求められる。家畜の売却や出稼ぎ、就学などのために都市部に行く機会が多いのは男性である。そうした時に人びとは他人の ID カードを借りていた。とくに出稼ぎに行く若い男性は、顔面全体をビーズや赤い染料で化粧した青年の格好をして ID カードの写真に写っていることが多い。もし、ナイロビやマルサビットといった都市部で異民族出身の警察官に職務質問された時、「これが私だ」と言っても、警察官にはわからないことを、若者たちはよく知っていた。このように多くのアリアルが国民として未登録のままであり、住民は ID カードの貸借によってこの状況に対処していた。しかしながら国民登録をしていない住民は選挙権がない。すなわちライサミス選挙区には、かなりの数の「潜在する票」という政治資源が存在していたといえる。

こうした状況のなかで、2006 年の補欠選挙時に、「アリアルの国民登録問題」が問題化した。M 集落での聞き取りによれば、レクトン氏の運動員は以下のように説明したという。

【事例 3】 アリアルルの国民登録問題に関する選挙演説¹¹⁾

「レンディーレは子供でも ID を持っている」、「しかしわたしたちはどうだ。多くの人が ID をもっていない」「だからレンディーレはこれまで選挙に勝ってきた」「もしレクトン氏が国会議員になったら、みなさんに ID を与えるだろう」、「レンディーレに支配されたままの状況をぬけだそう」。

補欠選挙の後でライサミス選挙区内の各地に役人が派遣され、国民登録が推進された結果、有権者数が急増した。表 4 は、ライサミス県でおこなわれた 2002 年、2006 年、2007 年の国会議員選挙における有権者数を示している。この表が示すように 2006 年から 2007 年までの一年間で、有権者数が急増している。

2007 年国会議員選挙の選挙結果速報をラジオで聞いていたライサミス選挙区の人びとは、レクトン氏を 2 度目の勝利に導いた増加分の票のほとんどはアリアルルのものであると信じていた。すなわち 2006 年の補欠選挙時の選挙演説と選挙後の国民登録の推進という出来事は、ライサミス選挙区の人びとには「政治的マイノリティ」アリアルルの誕生と、そのエンパワーメントという物語として記憶されたのである。こうした動きはアリアルルとレンディーレの民族的帰属の差異を問題化した。すなわち 2006 年の補欠選挙を契機に、これまで分かちがたく共存してきたアリアルルとレンディーレは、明瞭な境界をもち政治的に対立する集団になっていったのである。

表 4 ライサミス選挙区における有権者数の推移

選挙がおこなわれた年	有権者数 (人)
2002	14,087
2006	15,610
2007	22,411

注 1 : Electoral Commission of Kenya (<http://www.eck.or.ke/>) より作成。

6 2007 年国会議員選挙と「マサゲラ」アイデンティティの出現

6.1 「敵」の創出と呼びかけ

補欠選挙の一年後に通常の国会議員選挙があることはあらかじめわかっていた。最初から決まっていた。このため 2007 年国会議員選挙のための選挙運動が補欠選挙終了直後から休むことなく継続されたため、結果的に選挙運動は長期化した。ここでは

2007年国会議員選の選挙運動によって、レンディーレとは明確に異なる「マサゲラ」アイデンティティが出現した過程を分析する。

2007年の国会議員選挙では、与党・国民統一党（PNU）が、アリアールのルルグシュ・クラン出身のレクトン氏を支持した。そして野党・オレンジ民主運動（ODM）は、口承伝承によればレンディーレのサーレ・クラン起源でアリアールのロンゲリ・クランに編入したグループ出身のアブバカル・ハルグラ氏を支持した。ハルグラ氏は大学卒業後、ナイロビでコンピューター技師として勤務していた経歴をもつ。両候補者の出身地と帰属するクランから考えれば、ふたりともアリアールであると言える。しかしながら今回の選挙時にはレクトン氏が「アリアールの代表」、そしてハルグラ氏が「レンディーレの代表」として位置づけられた。補欠選挙で敗れたロイリロ・マリー氏も与党から出馬したが、今回は泡沫候補であった。

今度はすべての候補者がコミッティを組織した。各コミッティは、アリアールやレンディーレのクラン集落体内部のさまざまな差異を政治化しようとした。それは民族やクランの差異だけではない。たとえばハルグラ氏はモーリ年齢組で、レクトン氏はコロロ年齢組に属していたので、彼らはそれぞれ同一の年齢組員同士の連帯感にも訴えかけた。また、レンディーレではこれまで、選挙の争点は半族への帰属にあった。たとえば、これまでライサミス選挙区の国会議員は東半族出身であった。そしてレンディーレの文脈では、レクトン氏は西半族、ハルグラ氏は東半族の代表と位置づけられていた。このように選挙運動時にはさまざまな社会範疇が政治化されたが、なかでもアリアールとレンディーレという範疇の対立構図がもっとも先鋭化し、多様な言説が動員された。

【事例4】 飼養家畜の違いによるレンディーレとアリアールの差異の強調¹²⁾

ハルグラ氏を支持するレンディーレの長老が、レクトン氏を「尾の切れた黒い子牛だ。ウシはラクダに勝てない」と呼んでいたという話が、アリアールに伝わってきた。「黒いウシ」は、レクトン氏が帰属する黒いウシ半族を意味する。サンプルの飼養家畜と分節出自体系を示すことで、レンディーレにとってのレクトン氏の文化的な他者性を強調している。小さく、また尾の切れているということは、レクトン氏が弱く、不完全な存在であることを示唆している。また「ウシはラクダに勝てない」という言葉でレンディーレやサンプルの伝統的飼養家畜の喩えをもちいることで、両者の典型的・単純な差異を際立たせた上で、レンディーレの優位性を強調している。ここではアリアールがサンプルと同一視され、強く他者化されている。

このように2007年の総選挙における人びとの語りや運動員の演説には、レンディーレとアリアールの文化的差異を強調するような言説が多くみられるようになった。またこのときから「マサゲラ」という単語が頻出するようになった。

【事例 5】 言語の違いによるマサゲラとレンディーレの差異の強調¹³⁾

アリアルルのいくつかの集落でレクトン氏の運動員によって以下のような演説がおこなわれた。「これまでのレンディーレの国会議員は、私たちの陳情を聞いてくれなかった。なぜなら私たち「マサゲラ」はサンプル語を話す、レンディーレ語はうまく話せない。だから私たちの言葉で直接対話することができる国会議員が必要だ」「私たち「マサゲラ」の候補者を国会議員にして、これまでレンディーレが独占していた掘り抜き井戸を掘ってもらおう」。また、レクトン氏運動員グループはしばしば衛星電話を携帯していた。そして演説後にレクトン氏と電話をつなぎ、人びとが「同じ言葉で直接」陳情できることをその場でアピールした。

各候補を支持する運動員や支持者は、「わたしたち」と異なる「彼ら」という範疇を創造するため、出自や言語や生業といった文化的差異を強調した。とくにアリアルル文化を強調する運動員は、「サンプル語を話す、サンプル文化の担い手としての私たち」というアリアルル・アイデンティティの構築をこころみだ。その過程で、これまでのレンディーレ語の他称であるアリアルルにかわって、忘れかけられていたサンプル語の他称であるマサゲラが復活するに至ったと考えられる。また一部の運動員たちはCDFがレンディーレになかば独専的に使用されたことをほのめかしていた。しかしながら、先述したように、CDFは前国会議員の在任中からアリアルル地域に重点的に用いられており、そうした発言は実態とは異なっている。ただしそれは「政治的マイノリティ」マサゲラというアイデンティティを創り出すためには、十分役立った。そしてレンディーレとマサゲラは「敵」であると位置づけられはじめた。

【事例 6】 戦いのアナロジー¹⁴⁾

レクトン氏の運動員はアリアルルの集落での演説時に、投票カードを武器に、選挙を戦いにたとえた。「この槍で、レンディーレと戦おう」。

これまでアリアルルは、レンディーレやサンプルを「異民族 (*muge*)」ではなく「異母兄弟 (*lalache*)」あるいは「他クランの人 (*leichinga*)」と認識していた。「異民族」にはトゥルカナ、ボラナ、ソマリのような敵対的な関係にある近隣民族が含まれる。異民族の殺害は「殺人」ではなく、「名誉ある行為」として認識される。一方、サンプルやレンディーレの殺害は、アリアルルを殺害した場合と同じく「殺人」として認識される。そして「槍」は「異民族」との戦闘時に用いる伝統的な武器である¹⁵⁾。つまり運動員は、レンディーレは殺害すべき「異民族」であり、「マサゲラ」であるあなたは、レンディーレに勝利するための戦い、すなわち投票に行かなければならないと呼びかけたのである。

このようにして2007年国会議員選挙の際に各候補の運動員や支持者たちは、国会

議員という資源をめぐる民族主義的な対立構造を構築した。マサゲラ・アイデンティティは、こうした選挙運動の過程で創造されたのである。そして、レンディーレを他者化することで想像されるマサゲラ・アイデンティティの呼びかけに対して、多くの人びとが応えた。そしてこの新たなエスニシティは一部の運動員や支持者たちだけではなく一般のアリアルやレンディーレによって自律的に強化・再生産されていった。その結果、呼びかけに応えない人びとには、伝統的な邪術による制裁が科せられるという事態も生じていた。

【事例7】 邪術とクラン・イデオロギー¹⁶⁾

邪術 (*kuripore*) をもつことで有名な、マソラ・クランの長老は、「アリアル代表」であるという理由でレクトン氏を支持していた。彼は投票者を決める長老会議のときに「マソラ・クランの人でわたしたちに対立する者（ハルグラ氏に投票する者）は、太陽が沈むようになる（確実に死ぬ）。わたしたちは（ハルグラ氏に投票する者を）あの山の頂上の岩の上から突き落とす（ように確実に呪い殺す）」と発言した。

選挙運動員からの呼びかけにこたえたアリアルの人びとは、自分たちをレンディーレとは明確に異なる集団「マサゲラ」であるという意識を持った。そしてそれは長老会議やクラン集落の連帯意識、あるいは邪術といった伝統的な回路を通じて、レンディーレ対マサゲラという対立構図が強化・再生産されるにいたった。逆にレンディーレの側も「支配的なレンディーレと少数集団としてのマサゲラ」という構図を共有しており、それが逆転することに対する危機感を感じていた。

多くのレンディーレは、ハルグラ氏を「レンディーレの代表」と認識していた。さらに一部のレンディーレは「ライサミス選挙区におけるこれまでのレンディーレの支配的な立場」が逆転することを恐れていた。この構図を信じているレンディーレにとって、いまや「票数の上で劣る」レンディーレが勝利するためには、「アリアルの票」をどのくらい切り崩すことができるかにかかっている。以下の事例はレンディーレもまた、「アリアル対レンディーレ」という構図を強く内在化していることを示している。

【事例8】 レンディーレの危機感¹⁷⁾

レンディーレが多く居住するコル町でも、両候補による選挙運動は盛んにおこなわれた。このときレンディーレの長老たちは、ハルグラ氏に対して以下のような発言をしたといわれている。「行け。そしてその金をハイエナたち（アリアル）にくれてやれ。行ってハイエナたちのご機嫌をとるのだ」。

ライサミス選挙区の国会議員選挙での投票率を見ると、2002年が57%だったのに対して、2006年が72%、2007年には78%と上昇していた。その一方で、当選者の得票率は、2002年が83%だったのに対し、2006年と2007年はともに50%程度だった。ここから2006年以降の選挙では、これまで投票に関心がなかった人が投票をおこなっていること、そして接戦であったことがわかる。このことは選挙運動のなかで運動員による呼びかけに応えることで誕生した「マサゲラ」と「レンディーレ」が、国会議員という資源をめぐるはげしい争いに身を投じたことを示している。最終的にレクトン氏は10,001票、ハルグラ氏が7,189票を獲得し、レクトン氏の再選が決定した。

6.2 民族単位の地方自治

2007年の総選挙時に、ライサミス選挙区地域の行政的位置づけが大きく変化した。2007年12月にマルサビット県での演説の際に現職のキバキ大統領は、ライサミス選挙区を「県に昇格する」と宣言したのである。地方分権化が進んでいない。ケニアでは、行政上の力は県に集中している。したがって今後「マサゲラ」とレンディーレは、地方自治においてさらなる主導権を発揮することが可能になる。すなわちライサミス県で「マサゲラ」による地方自治がおこなわれる可能性すらある。

2006年と2007年の二つの国会議員選挙において、アリアルは、1)「マサゲラ」というエスニシティを構築し、2)特定の候補者を支持する有権者集団というかたちで成員を確保し、3)「民族自治」の領域を獲得した。こうしたことを考慮すれば、2007年のケニア総選挙にともなう新たなエスニシティの出現は、国家の資源をめぐる戦いによって、サンプルとレンディーレの境界におけるゆるやかな文化共同体・アリアルが、アイデンティティ・成員・領域を備えた、あたかも「国家」をもつかのよう文化・政治共同体としての「マサゲラ」に再編される過程の一部だと考えられる。さらにケニアのキバキ大統領は現在、ケニア各地で小選挙区を県に昇格したり、既存の郡の境界をもとに新たな小選挙区を創っている。たとえばライサミス選挙区は2009年に、ライサミス選挙区とロイヤンガラニ選挙区¹⁸⁾に分割された。その目的のひとつは、地方における行政上のサービス・デリバリーを向上させるためであると考えられる。しかしながら、現在のケニアで急増する小選挙区のなかでは、ライサミス選挙区と同様の民族や集団単位の地方自治をめぐる争いがおこなわれる可能性がある。

7 選挙が生み出した対立構造の解消

ライサミス選挙区における約2年の選挙運動はレンディーレとマサゲラという「民族」間の対立構造を生み出した。ケニアにおける小選挙区・複数政党制という選挙システム、そして近年のCDFの導入による地方政治と開発の結びつきを考慮すれば、今後、ケニアに210ある選挙区のそれぞれが、政治・経済的資源をめぐる、人びとを動員するためにさまざまな言説やイデオロギーが駆使される戦場になる可能性がある。

アフリカにおける政治的民主化の推進に際しては、選挙に関連して生ずる対立構造や暴力をいかに解消できるかが重要な論点のひとつである。本論文は選挙に関連して生ずる対立構造に注目し、ケニアの一選挙区を対象に、国会議員選時における民族カテゴリーの形成過程の分析をおこなった。そしてケニアの複数政党制の導入以降の民主主義的な選挙の際に、いかなる集合的アイデンティティがどのように動員されるかを検討した。

では、選挙時に本質化した集合的アイデンティティは選挙後にどうなったのだろうか。すなわち選挙に関連して生ずる対立構造を解消するために、人びとがどのような努力を払っているのかが明らかにされる必要がある。本章では選挙後に集合的アイデンティティを中和するようなアリアルの人びとの実践について検討し、それをもとにアリアル社会における集合的アイデンティティの特徴について議論する。

2007年ケニア総選挙は国内に大きな混乱を引き起こし、現在もおお完全に解決したとは言いがたい。しかしながらライサミス選挙区の人びとは、クラン帰属の先鋭化—中和というサイクルという在来のやりかたをベースに、明確化したマサゲラ・アイデンティティや、レンディーレとの対立的な関係を再びゆるやかなものに「修復」しようと努めているように見えた。もともとアリアルのクランは、内部にアリアルの他のクランやサンプル、レンディーレの移民を含み込んでいた。また、サンプル、アリアル、レンディーレ社会では約14年周期で更新される年齢体系の儀礼の時期にクランや民族の差異が先鋭化する。ただし、こうした儀礼の時期以外は、民族やクラン帰属の差異が問題化する機会は相対的に少なかった。すなわち、これらの社会はもともと、クラン帰属の先鋭化—中和というサイクルをもっていたと考えられる。むしろこうしたサイクルによって自らの帰属を再定義する人びとの実践が、アリアルの重層的なクラン帰属を造り上げてきたと考えられる。

【事例 9】 集団内の差異の隠蔽¹⁹⁾

選挙直後の 2008 年 2 月に、私はアリアルルのロンゲリ・クランの長老に、彼のクラン集落を構成するリネージの歴史についてのインタビューをしていた。このクラン集落は 2007 年の割礼執行時に「アリアルル系」と「レンディーレ系」のふたつのグループに分裂していた。アリアルルのロンゲリ・クランはおもにサンプルのロンゲリ・クランを起源とするリネージと、レンディーレのサーレ・クランを起源とするリネージから構成されている。サーレ・クラン起源のリネージは「ハルグライヨ」と呼ばれる。これは 2007 年の総選挙において「レンディーレ代表」とされたハルグラ候補の出身グループである。長老は、分裂したクラン集落のサーレ・クラン起源のリネージについて言及することを躊躇した。ところが、その場で、老人の躊躇を見ていた若者は、老人に対して「言ってしまう、隠すことは何もない」「私たちマサゲラはマサゲラの候補者に投票するべきだ。しかし、分裂したりリネージはもともとレンディーレのサーレ・クランの成員である。だからレンディーレの候補者を支持するのだ」と発言した。

事例 1 で検討したように、アリアルルでは、今おなじクラン集落に一緒に住んでいる人の「もとの出自」を暴露することは、その人の他者性を強調する結果となる。したがって、日常生活において「もとの出自」について言及されることはない。長老がサブ・クラン間の歴史的な差異の存在を隠蔽しようとしたのは、選挙によって創り出されたマサゲラとレンディーレの対立関係を中和しようとしたためだと考えられる。その一方で、おそらくまだ選挙の熱が冷めきっていなかった若者は、まだ差異を明確化していた。とはいえ長老も若者も、サーレ・クラン起源のリネージと選挙前と変わらない友好的な関係を維持していた。この集落に限らず、アリアルルのクラン集落で集落全体として支持している候補以外の候補に投票したり、対立候補のコミッティの成員だった人は存在する。しかしながらそうした人びとに対して選挙後に暴力行為がおこなわれることはなかった。

【事例 10】 選挙後の暴力の抑制

レクトン候補を支持していた M 集落では、ハルグラ氏を応援していたレンディーレの商人の家を焼き払おうとか、ハルグラ氏の熱心なコミッティの成員を村から追放しようとかいった計画が、一部の人びとの間で話し合われていた。しかしながら、そうした行為が実行されることはなかった。そうした行為に反対する人びとは、彼らが通常はよき隣人であり、選挙の際の意見の違いをのぞけば、さまざまな面でクラン集落に貢献している点を強調していた。

すでに述べたように、アリアルルのクラン集落には、他のクランや民族と兄弟関係や義兄弟関係をもつサブ・クランやリネージが存在する。この点に関してアリアルルには「1 カ所にとどまり続ける人間はいない (*meata ltugani neweni naapo*)」ということわざがあり、誰もが重層的な帰属意識をもっていることを意味している。選挙はク

ラン集落内に利害の対立を生じさせたし、運動員は人びとを動員するために民族やクラン・アイデンティティを政治化した。しかしながら人びとは「いま共存するうえでの便宜」を優先し、民族やクラン・アイデンティティの差異を理由に暴力行為をおこなうことは無かったのである。

8 考察

8.1 アリアルにおける帰属の重層性

本稿は、近年のアフリカ諸国における政治的民主化と地方分権化の流れのなかで、これまで「国家の外側」に位置づけられてきた東アフリカ牧畜社会の人びとがどのように国家に包摂され、そのことがこれまでの重層的な帰属にもとづく柔軟な民族間関係にいかなる変化をもたらしているのか検討してきた。

ケニアの周縁地域に分布するアリアルとレンディーレは、これまで歴史的な共生的関係を維持してきた。こうした共生関係にある民族の境界に生きるアリアルの人びとにとって重要だったのは、「民族」よりもむしろ「クラン」への帰属であった。そしてアリアルのクラン帰属は、血縁関係にもとづく「骨」の帰属のうえに、その後生じたさまざまな出来事を契機に獲得された帰属が「肉」の帰属として刻印される重層的な特徴を備えていた。この「肉」の帰属の獲得には、周期的に開催されるサンプル、アリアル、レンディーレの割礼儀礼が重要な役割を果たしていた。3章で検討したように、サンプル、アリアル、レンディーレの割礼儀礼は、ほぼ同時期におこなわれる相互に関連した儀礼として認識されている。そして各民族の割礼儀礼は、クランやサブ・クラン単位で開催される。このため周期的に訪れる割礼儀礼の時期には、人びとは重層的なクラン帰属のなかからひとつのクランを選択し、そのクランやサブ・クランの成員として割礼儀礼に参加しなければならない。たとえば、もしクラン A に帰属するリネージの成員が別のクラン B で割礼儀礼を受け続ければ、彼の子孫はクラン B への帰属を「肉」の帰属として獲得する。このように、既存の出自体系の構造のゆらぎ—クランを超える移住や共住といった集団的あるいは個人的な経験—が、周期的におこなわれる年齢体系の儀礼を経ることで「肉」の帰属として再構造化される。すなわちアリアルにおけるクラン帰属の重層性を生み出す「肉」の帰属は、個人的な経験と社会構造の相剋のなかで生成すると考えられる。

またサンプル、アリアル、レンディーレ社会においては、クランへの帰属は相互

行為の準拠枠として参照される。したがって割礼儀礼以外の相互行為の場面において人びとは、自他のクランへの帰属を明確にする必要がある。その際に人びとはクラン帰属を、「骨」およびそれに重層する「肉」の帰属のなかから、状況に応じて選択している。しかしながら、主張したクラン帰属が相互行為の相手に受け入れられるかどうかは、むしろ北東アフリカの牧畜社会にひろく見られるように、相互行為の相手の属性や、その場の状況や文脈における妥当性の水準で決定されるものである (Schlee 1989) と考えられる。このようにアリアルにおけるクラン帰属は、常に二進法的に言及されるのであるが、逆にそのことが帰属の重層性を生み出す契機となるのである。

8.2 国家への包摂と資源をめぐる対立

選挙によって選ばれた代表が、民意に従って行政をおこなうということ自体は、議会制民主主義の原則にもとづく行為である。しかしながら、これまでアリアルはケニア国内であるにもかかわらず、その外部に排除されてきた。ところが、2003年に導入されたCDFというケニアの財政的的地方分権システムは、これまで国家による行政サービスをほとんど受けてこなかった地域に水・教育・医療などの資源をもたらすことが可能な国会議員という政治的資源を生み出した。そして2006年におこなわれた補欠選挙に勝利したレクトン候補は、アリアルがこれまで「国家の外側」に放置されてきたことを問題化し、公民権の獲得に向けて対処することで、支持を集めることに成功した。このように、ライサミス選挙区と同じような「国家の外側」に生きてきた牧畜社会の人びとは現在、国家への包摂をめぐる大きな変化を経験していると考えられる。

また1991年以來のケニアにおける二大政党制の導入が生み出す二極的な対立軸は、小選挙区単位でおこなわれる国会議員選挙を、政党間の激しい代理戦争にした。ライサミス選挙区でおこなわれた2007年の国会議員選挙という政治的な意思決定の場では、選挙運動員を中心とする政治エリートたちは、アリアル文化がもつサンプル性という過去の「隠されたアイデンティティ」を問題化した。そして、ライサミス選挙区の開発にかかわる政治的資源をめぐる相争うマサゲラとレンディーレという利害集団が構築された。その過程では、クラン集落の長老会議という伝統的な権威をコミッティ・システムによって解体し、選挙の意思決定過程を個人化した。そして邪術や伝統的な敵といった伝統的な言説を演説時にもちいることで、これまでのアリアルにおける重層的なクラン帰属の連鎖からなる「顔」(小田2001)を解体し、個々の有権者とクランや民族全体が無媒介に結びつく均質で抽象度の高い共同性を構築しよ

うとした。このように近年のケニアにおける地方分権化と政治的民主化の流れは、これまで国家の外側に排除されてきた牧畜社会を均質で抽象度が高い共同体として包摂する過程で、国会議員という「資源を巡る対立」(Markakis 1997)を構築していると考えられる。

8.3 選挙後の敵意への対処

しかしながらアリアルの人びとは、長い選挙運動の過程で政治エリートによって創り上げられた利害集団としてのエスニシティやそれらの間の敵意にうまく対処しているように考えられる。アリアルやレンディーレの社会において、民族やクランの帰属をその都度明示することは、さまざまな場面でおこなわれる行為である。たしかに選挙運動時には、運動員による「隠されたアイデンティティ」(Little 1992)をもちいたさまざまな動員によって、人びとの重層的な帰属のひとつが強調された利害集団が形成された。しかしながら、それは国会議員選挙という文脈において有効な利害集団に過ぎない。ひとたびその文脈をはずれば、別の利害集団が形成されると考えられる。またアリアルの人びとはこれまでも政治的対立が発生した場合、相手の隠されたアイデンティティを暴露し、相手を他者化することもおこなってきた。すなわち人びとは、これまでの民族やクランを超えた社会関係の集積である重層的な帰属を、あたかもトランプのカードのように用いながら、クランや民族を超えた他者との関係を模索しているのである。

このようなアリアルの人びとの民族やクランへの帰属をめぐる態度や実践は、東アフリカ牧畜民に見られる「民族や文化的帰属といったその場に外在するものよりも、その場における他者との共存を達成することを重視している態度」(北村 2002)と深く関係していると思われる。たとえばケニア北西部に分布する牧畜民トウルカナの人びとは突然建設された難民キャンプに暮らす難民たちに対して、他者との共存を重視した即興的な対処法にもとづいて新たな協力関係を構築した(Ohta 2005)。

一見すると、アリアルの人びとは出自体系やそれに付随する規則によって自らの帰属を決定しているように見る。しかしながら他方で、個別の社会関係や状況にもとづく意志決定を重視している。単一の「骨」の帰属のうえに「肉」の帰属が重層しているなかで、「骨」の帰属が特権的な地位を帯びることがないのは、その証左である。このようにアリアルの人びとが、その場の文脈における他者との共存の達成を重視する態度をとっているからこそ、これまで歴史的な相互関係を築いてきた隣人を、言説のレベルで民族的・文化的帰属が異なる「他者」として本質化することはあつて

も、ケニアの他の地域、あるいはルワンダやスーダンのような他のポストコロニアル国家のように、物理的暴力を用いた排除に発展しなかったのだと考えられる。

9 おわりに

東アフリカ牧畜社会においては、民族を超えた複合的で重層的な帰属をもつ人びとによって構成される社会のほうが、むしろ一般的である。こうした社会で、人びとが自己と他者の関係を同定し、どのような関係を志向してゆくのかは、出自体系や年齢体系によって規定された社会関係を基盤にしつつも、その場の参加者の間でおこなわれる交渉にもとづいて当事者中心的に決定される。こうした当事者中心的な社会関係が生み出す他の民族やクランの成員との柔軟な関係は、広範な土地を利用する遊牧的な牧畜を継続する過程で、他集団の水資源や放牧地にアクセスする際に不可欠である。このような東アフリカの牧畜社会をささえてきた社会的実践が、選挙時の動員が形成する利害集団を選挙後すみやかに無効化し、紛争を抑止する働きをしている点を指摘した。

また近年、市場経済への統合・学校教育の普及・国家の司法・立法・行政システムへの包摂・開発計画の実施といった外部からの影響を容赦なく受けるなかで、東アフリカ牧畜社会は大きく再編されつつある。そうした再編の過程にある牧畜社会の民族やクランといった政治的単位は、もはや伝統的な文化共同体ではないが、完全に均質化した政治・文化共同体でもない。アリアルの人びとによる民族やクランを超えた社会関係やそれにもとづく重層的な帰属を維持する実践は、これまでの国家による排除や包摂の動きがもたらす、人びとを分類、均質化し、支配する力（クラストル1987）に抗しつつ、新たな社会のあり方を模索する際のひとつの可能性をあらわしていると考えられる。しかしながら、隣人の他者としての本質化が、どのような場合に「民族浄化」といった物理的暴力を用いた排除に発展し、どのような場合に抑止されるかについては、今後の他の事例との注意深い比較検討が必要である。

謝 辞

本研究の実施にあたっては、特別研究員奨励費「アフリカ牧畜民社会における生業変容と民族間関係の動態に関する人類学的研究」（研究課題番号 02J01245, 研究代表者：内藤直樹）、平成20年度～平成23年度科学研究費補助金（若手研究：B）「長期化難民の社会・文化・アイデンティティの再構築と開発に関する人類学的研究」（研究課題番号 20710190, 研究代表者：内藤

直樹), 財団法人大同生命国際文化基金・平成12年度研究助成, 京都大学 GCOE プログラム「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」次世代研究イニシアティブ・平成19年度研究助成を受けました。

本論文の作成にあたり京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授の太田至博士, 同准教授の木村大治博士および同准教授の重田眞義博士をはじめとするスタッフや院生のみなさんには数多くのご助言をいただきました。また日本学術振興会ナイロビ研究連絡センターの歴代センター長のみなさまには現地滞在中に多大なご支援をいただきました。アリアルルのモーリヤ年齢組のエイジメイトをはじめとする調査地のみなさんは, わたしが集落で暮らすことを受け入れ, つきあってくださいました。記して謝意を表します。

注

- 1) 佐藤(1992)は「環状集落」と呼んでいる。
- 2) たとえば Daily Nation の 2007 年 4 月 12 日付の “Elections 2007-Laisamis: Face-off between MP and Ngoyoni’s widow” というタイトルの記事において, アリアルルはサンプルとして記述されている。
- 3) UNESCO IPAL プロジェクト。
- 4) もともとレンディーレの年齢組の名称の一部は, ボラナやガブラといった他の牧畜民の世代組の名称と一致していた (Schlee 1989)。しかし近年, レンディーレの年齢組の名称はサンプルのものに置き換わっている。
- 5) Spencer (1965) は, サンプルの出自体系を半族・フラトリー・クラン・サブクランという順に構造化した。サンプルではクラン (*Imarei*) が外婚単位だが, いくつかのクラン (*Imasula* と *lpisikisyu*) ではクラン内で婚姻可能な場合が存在する。Spencer はこうしたクランの存在を考慮して, クランの上位にフラトリーという分析単位をもうけた。しかしながらフラトリーはあくまでスペンサーが便宜上つくりだした分析単位であり, これに相当する現地語は存在しない。中村 (2007) は, この分析単位を採用することで外婚規則に関する論理的な整合性は保たれるのだが, フラトリーとクランがおなじ範囲を指し示す場合があり記述が煩雑になることを理由に, フラトリーという分析単位を使用していない。本論でもこれに従ってフラトリーという分析単位は使用しない。
- 6) イトゥリア (*iuria*) とは, サンプルとレンディーレの分節出自体系には存在しない出自分節である。Spencer (1973) によれば, イトゥリアという言葉はサンプル語で「寄せ集め」を意味する *a-terit* という語から派生しており, レンディーレからは「アリアルル」の代名詞のようなクランとして認識されている。イトゥリアは, その内部がレンディーレの異なるクランを起源とする 4 つのサブグループにわかれており, 単純に血縁集団とは言いがたい。口承伝承によればイトゥリアは, レンディーレのデブサイ・クラン, サレー・クラン, ガルディーレン・クラン, ロングモ・クラン出身の始祖がサンプルのビシキシュ・クランに編入した後, その子孫がレンディーレに戻ってきたことで形成された。そしてイトゥリア・クランには, これまでサンプルのビシキシュ・クランのラウノニが訪問していた。すなわち 1) 他のクランと同じ現地語で示されるカテゴリーであること, 2) 起源こそ異なるものの, サンプルのビシキシュ・クランに編入した同一クラン員同士であるとの認識からサブ・クラン間の通婚をしないこと, 3) サンプルの側もビシキシュ・クランのメンバーであると認識していることから, 本論ではイトゥリアをクランであると定義する。
- 7) アリアルルのイトゥリア・クラン, マソラ・クランとサンプルのオンゲリ・クラン, ルクマイ・クランへの聞き取りによれば, 2004 年にサンプルのマソラ・クランとルクマイ・クランのラウノニがアリアルルを訪問した。また実際には訪問しなかったが, ロンゲリ・クランのラウノニは, 状況次第では訪問する予定であると答えていた。
- 8) 最大 7.5% まで拡大する計画がある。
- 9) 現地調査をおこなったアリアルルの M 集落において, 2007 年末に本事例の当事者数名に

- おこなった聞き取り調査にもとづく。
- 10) 2007 年末に、M 集落からルルグシュ・クランの儀礼集落に移住した当事者 2 名に対しておこなった聞き取り調査にもとづく。
 - 11) アリアルルの M 集落で選挙運動をおこなっていたレクトン氏のコミッティに属するモーリ年齢組の若者に対して 2007 年末におこなった聞き取り調査にもとづく。
 - 12) アリアルルの M 集落において、2007 年末におこなった聞き取り調査および、ナイロビに居住しているレンディーレのデュブサイ・クランに属する若者に対する聞き取り調査にもとづく。
 - 13) アリアルルの M 集落で選挙運動をおこなっていたレクトン氏のコミッティに属するモーリ年齢組の若者に対して 2007 年末におこなった聞き取り調査にもとづく。
 - 14) アリアルルの M 集落で選挙運動をおこなっていたレクトン氏のコミッティに属するモーリ年齢組の若者に対して 2007 年末におこなった聞き取り調査にもとづく。
 - 15) サンプル、レンディーレ、アリアルル間の戦いの場合には、殺傷力の低い棍棒がもちいられる。
 - 16) アリアルルの M 集落で選挙運動をおこなっていたモーリ年齢組の若者に対して 2007 年末におこなった聞き取り調査にもとづく。
 - 17) アリアルルの M 集落で選挙運動をおこなっていたモーリ年齢組の若者に対して 2007 年末におこなった聞き取り調査および、ナイロビに居住しているレンディーレのデュブサイ・クランに属する若者に対する聞き取り調査にもとづく。
 - 18) ロイヤンガラニ選挙区は本稿でサンプル・トゥルカナ地域とした範囲と一致する。
 - 19) 2008 年 2 月にアリアルルのロンゲリ・クランのクラン集落の長老に対しておこなった聞き取り調査にもとづく。

文 献

- Anderson, D.M. and V. Broch-Due (eds.)
1999 *The Poor Are Not Us: Poverty and Pastoralism in Eastern Africa*. Oxford: James Currey.
- Daily nation
2007 Elections 2007—Laiamis: Face-off between MP and Ngoyoni's Widow.
- Dyson-Hudson, R. and N. Dyson-Hudson
1969 Subsistence Herding in Uganda. *Scientific American* 220(2): 76–89.
- Fratkin, E.
1991 *Surviving Drought and Development in Kenya's Arid Lands*. Boulder: Westview Press.
1993 Maa-Speakers of the Northern Desert: Recent Developments in Ariaal and Rendille Identity. In Spear, T, Waller, R (eds.) *Being Maasai: Ethnicity and Identity in East Africa*, pp. 237–289. Oxford: James Currey.
- 福井勝義
1988 「文化イデオロギーと民族の生成——ボディ社会をめぐる戦いの事例から」川田順造・福井勝義共編『民族とは何か』pp. 187–212, 東京：岩波書店。
- Galaty, J. G., D. Anderson, P. C. Salzman and A. Chouinard (eds.)
1981 *The Future of Pastoral Peoples*. Ottawa: International Development Research Centre.
- Gregersen
1977 *Language in Africa: An introductory survey*. New York: Gordon and Breach.
- Hardin, G.
1968 The Tragedy of the Commons. *Science* 162: 1243–1248.
- Hogg, R.
1986 The new pastoralism: Poverty and dependency in northern Kenya, *Africa* 56 (3): 319–333.
1992 Should pastoralism continue as a way of life? *Disasters* 16: 131–137.
- 北村光二
2002 「牧畜民の認識論敵特異性——北ケニア牧畜民トゥルカナにおける「生存の技法」」佐藤俊編『講座生態人類学 4 遊牧民の世界』pp. 87–126, 京都：京都大学学術出版会。

- クラストル, P.
 1987 『国家に抗する社会: 政治人類学的研究』 渡辺公三訳, 東京: 水声社。
- 栗本英世
 1999 『未開の戦争, 現代の戦争』 東京: 岩波書店。
- レクトン, J. L.
 2006 「ぼくはマサイ——ライオンの大地で育つ」 さくまゆみこ訳, 東京: さ・え・ら書房 (Lekuton, J. 2003. *Facing the Lion: Growing Up Maasai on the African Savanna*. Washington, D.C.: National Geographic Society)。
- Lindberg, S.
 2006 *Democracy and Elections in Africa*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press.
- Little, P. D.
 1987 Land use conflicts in the agricultural/pastoral borderlands: the case of Kenya. Little and Horowitz (eds.) *Lands at Risk in the Third World*, pp. 195–211. Boulder: Westview Press.
 1992 Maasai Identity on the Periphery. *American Anthropologist* 100(2): 444–457.
 2003 *Somalia: Economy Without State*. Oxford: James Currey.
- Mamdani, M.
 1996 *Citizen and Subject: Contemporary Africa and the Legacy of Late colonialism*. Princeton: Princeton Univ. Press.
- Markakis, J.
 1997 *Resource Conflict in the Horn of Africa*. London: SAGE.
- 内藤直樹
 2004 「牧畜民アリアルルの複合的なアイデンティティ形成——『同一経験の共有』に基づく帰属意識形成の事例から」 田中次郎・佐藤俊・菅原和孝・太田至共編『遊牧民——アフリカの原野に生きる』 pp. 567–592, 京都: 昭和堂。
 2005 「ライフストーリーの語りから見た牧畜民アリアルルにとっての家畜の価値」『バイオストーリー』 4: 106–123。
- 中村香子
 2007 「牧畜民サンプルの「フェイク」と「オリジナル」: 観光の文脈の誕生」『アジア・アフリカ地域研究』 6(2): 559–578。
- 小田亮
 2001 「越境から, 境界の再領土化へ——生活の場での〈顔〉のみえる想像」 杉島敬志編『人類学的実践の再構築: ポストコロニアル転回以後』 pp. 297–321, 京都: 世界思想社。
- Ohta, I.
 2005 Coexisting with Cultural ‘Others’: Social Relationships between the Turkana and the reugees at Kakuma, Northwest Kenya. In K. Ikeya and E. Fratkin. (eds.) *Pastoralists and Their Neighbors in Asia and Africa* (Senri Ethnological Studies No. 69), pp. 227–239. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Potkanski, T.
 1994 *Pastoral Economy, Property Rights and Mutual Assistance Mechanisms among the Ngorongoro and Salei Maasai of Tanzania*. London: Fieldwork Report, International Institute for Environment and Development.
- Republic of Kenya
 1989 *Kenya Population Census 1994: Volume 1*. Nairobi: Central Bureau of Statistics, Office of the Vice-President and Ministry of Planning and National Development.
- 笹岡雄一
 2007 「ケニアの集権的体制と分権化」 独立行政法人国際協力機構 国際協力総合研修所編『アフリカにおける地方分権化とサービス・デリバリー: 地域住民に届く行政サービスのために』 pp. 69–85, 東京: 独立行政法人国際協力機構。
- 佐藤俊
 1992 『レンディーレ: 北ケニアの遊牧民』 東京: 弘文堂。
 2002 「レンディーレ社会におけるねだりの社会的制御」 佐藤俊編『遊牧民の世界』 pp. 267–324, 京都: 京都大学学術出版会。
- Schlee, G.
 1989 *Identities on the Move: Clanship and Pastoralism in Northern Kenya*. Manchester:

内藤 東アフリカ牧畜社会における政治的民主化と民族間関係の動態

Manchester University Press.

Sobania, N. W.

1980 *The Historical Tradition of the Peoples of the Eastern Lake Turkana Basin, c.1840–1925*. Ph.D. thesis, University of London.

1988 Fishermen herders: Subsistence, survival and cultural change in northern Kenya. *Journal of African History* 29: 41–56.

曾我亨

1997 「国家の外から内側へ——ラクダ牧畜民ガブラが経験した選挙」佐藤俊編『講座生態人類学 4 遊牧民の世界』pp.127–174, 京都：京都大学学術出版会。

Spear T. and R. Waller (eds.)

1993 *Being Maasai: Ethnicity and Identity in East Africa*. London: James Currey.

Spencer, P.

1965 *The Samburu: A Study of Gerontocracy in a Nomadic Tribe*. London: Routledge and Kegan Paul.

1973 *Nomads in Alliance: Symbiosis and growth among the Rendille and Samburu of Kenya*. London: Oxford University Press.

1998 *The Pastoral Continuum: The Marginalization of Tradition in East Africa*. Oxford: Clarendon Press.

津田みわ

1995 「ケニア身分証明制度の現在——偽造「キバンデ」時代の到来」『アフリカレポート』21: 9–13。

2004 「ケニアの複数政党制——その軌跡と機能変化する法制度」津田みわ編『アフリカ諸国の「民主化」再考——共同研究会中間報告』pp. 127–165, 東京：アジア経済研究所。

Waller, R.D.

1985 Ecology, migration and expansion in East Africa, *African Affairs* 84 (336): 347–370.